

2014 年5 月

東京物語

私たちは反対するためではなく、守るために戦っています。

そう、デйм・ザハのオリンピック・スタジアムは大き過ぎるのです。しかしスケールとサイズが問題なのでしょうか？（訳注：「デйм」は英国で叙勲された女性の称号。男性の「ナイト」に相当。）

槇文彦は以下のように述べています。

「これほど緑豊かな場所は東京にはあまり見当たらないことを考えれば、これほど大きな建物を立てることは疑問に思われるだろう。」このスタジアムは東京都によって風致地区に指定された神宮外苑に計画されており、新宿御苑や代々木公園とも隣接するものです。

50 以上のブログや建築関連のウェブマガジンの記事（多くはあるインタビューをソースとしたコピーであり、本当の問題を分析しているものはごくわずかではあるが）に目を通せば、新国立競技場の問題はその大きさではないことがはっきりと見えてきました。コンペティションの審査委員長を務めた安藤忠雄によれば、審査概要では、日本の技術力を体現するシンボルとなり得る象徴的な建物を求めています。

「そのために、シンボルが必要だ。日本人みんなが誇りに思い、応援したくなるような。」

「日本を変えたい、と思う。新しい日本をつくりたい、と思う。もう一度、上を向いて生きる国であるように。」コンペティションの応募要項にはそう書かれています。

となれば、前半の、この上なく明快な問いかけを文字通り受けとめて、正面からそれに応えたザハ・ハディットを、私たちが責めることなどできるでしょうか？ 人々の度肝を抜くアイコンックな作品をつくるという点において、彼女の建築はとても優れています。

すると、まず問いかけるべき疑問は、アイコンックな作品が、果たして日本が「変わる」ためのシンボルとなるものだろうか、ということです。

ここで、今すぐ議論すべき緊急課題をいくつか提示したいと思います。

- 今、必要とされている革新性とはどのようなものか？
- モニュメントの役割とは何か？
- 建築とその政治的意義とは？
- 建築家の責任とは？

次の論点から考えてみたいと思います。

建築家とは

丹下健三は、まだ見ぬ明るい未来を夢見ながら、過去の体験を織り合わせ、力強い声明を打ち出す建築を創りだして、名声を得ました。こうして、彼の建築は、時間と空間の両方における道標となったのです。建築が、その時代に意味を持ち、また、過去と現在を交流させる（つなぐ）ものとなるためには、過去を理解することが必要です。

政治的意義とは

オリンピック大会および関連施設は、大きな政治的意義を持つイベントです。1968年メキシコ大会、1972年ミュンヘン大会、1992年バルセロナ大会など、多くのオリンピック大会もこうした意義を担っていました。とりわけ、1972年ミュンヘン大会は、当時のドイツ社会全体が目指していた精神を体現したものであり、それが建築にも、とても美しく凝縮されていました。ベーニッシュとオットーが手がけた、壮大な屋根と優雅な構成を持つオリンピック・スタジアムは、一つのモニュメント（記念碑）となりました。だからこそ、このスタジアムを解体することなど到底考えられません。このスタジアムはいまや、ドイツのアイデンティティと歴史の一部となっているからです。

終戦後の経済復興と政治再建への取り組みにおいて、東京の国立競技場が重要な役割を果たしてきたことは、周知の通りです。国立競技場というスポーツ施設は、明るい未来を目指す象徴的存在でした。歴史の流れによって破壊されたアイデンティティを、新しく作り直していく努力を支えてくれた存在でした。

こうした過去を、ただ葬り去ってしまってもよいのでしょうか？ ここにあるもののすべてが、過去に関わり、つながっているのです。スケールをまた、国立競技場の周辺環境の性質を、緑あふれるこの地区全体を無視してよいのでしょうか？

モニュメントの役割とは

モニュメント性を有するアイコンがいまも必要なのだと仮定するならば、現代的モニュメントの性質とは何か、モニュメントが時代を超えて歴史を伝える力とは何か、明確に考えていかなければなりません。

排他的ではなく、包括的なモニュメント

無駄ではなく、リソース（未来にとっての糧）にあふれるモニュメント

声高に主張するのではなく、人々の声に耳を傾けるモニュメント

過去を消し去るのではなく、歴史を構築し続けるモニュメント

2020年の東京オリンピック大会は、モニュメントの役割を再定義する機会を提供するものであり、私たちの時代を後世に伝える意義深い道標となるべきものです。

クライアントの皆様、
2020 年東京オリンピック組織委員会の皆様、

1964 年のオリンピック大会を新しいエコロジーに生きるための道標としてとらえ、近代日本の歴史に貢献した国立競技場を改修・増築することこそ、よりよい決断ではないでしょうか？ 日本の皆さんは、なぜ、ここにある素晴らしい歴史を消し去ろうと躍起になっているのでしょうか？ 現競技場の解体だけが、国立競技場を新しくする唯一の方法なのでしょうか？ 保存し保護すべきは、神社や古い建物だけではありません。

エコロジカルで柔軟でしなやかで生き生きとしたスタジアムを創る真の革新性を日本がもっていることを、知性を使って世界に示すために、私たちは戦わなければなりません。最先端技術を使ってエコロジーもどきなものを建てるよりも、むしろ、景観やインフラを尊重してこそ、私たちの都市や地域での暮らしをよりよいものに変えてくれるスタジアムを創ることができるのです。現代のように、自然破壊が進み、グローバル経済が行き詰まっている困難な時代にこそ、そういえるのではないのでしょうか。

2020 年東京オリンピック大会が未来を見据えた持続可能性のシンボルとなるよう、既存の競技場、周辺の建物や施設を改修・増築し、公園を再整備するという提案を、ザハ・ハディッド・アーキテクトに依頼することもできるのではないのでしょうか？ 国立競技場計画では、国が持続可能性という困難な問題に抜本的に取り組んでいる姿を見せるべきであり、そのためには、アイコンとしての建築のみならず、有用性の高い景観とインフラを記念するモニュメントとしての建築を考えていかなければならないはずです。

ナスリーヌ・セラジ教授
王立英国建築家協会AA ディプロマ
パリ・マラケ国立建築大学学長
アトリエ・セラジ・アーキテクト・アンド・アソシエイト代表
香港大学客員教授